

教育研究業績書

2024年10月22日

所属：英語グローバル学科

資格：教授

氏名：前原 澄子

研究分野	研究内容のキーワード
英文学	エリザベス朝, 劇, ロマンズ, 祝祭, 騎士道, 宗教改革
学位	最終学歴
博士(文学), M.A.(Renaissance Studies), 修士(文学)	関西学院大学大学院 文学研究科 英文学専攻 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. ライティング・プラザの設置	2016年4月から2017年3月	・武庫川女子大学『さらなる大学教育質向上のために』教育・改革プラン ・ライティング・プラザ(英語ネイティブ対応)を学内(図書館5階)に設置し、学生の英語ライティング力の向上を支援する環境整備を促進する学際的事業である。
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 高等学校教諭専修免許(英語)	1993年3月	
2. 中学校教諭専修免許(英語)	1993年3月	
3. 通訳案内業免許(英語)	1988年12月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. ジェンダーロールの呪縛と越境	共	2023年12月	英宝社	分担執筆：竹山友子、前原澄子、齊藤美和、西垣佐理、中川千帆 担当箇所：pp. 16-39. 「下層階級におけるジェンダーロールの曖昧性ー『西国の美しい娘』(第1部)のヒロインをめぐって」 概要：16世紀末から17世紀にかけて大衆劇場で上演された、トマス・ヘイウッドの『西国の美しい娘』(第1部)のヒロインは、著しい主体性を発揮して商業活動に携わり巨額の富を築き上げるのみならず、男装して海賊船に乗り込み、敵国スペインに立ち向かう。本論考では、受動的、従属的な女性像とかけ離れたヒロインが労働者階級の娘である点に着目し、工業化以前の女性による商業活動と男装する女性兵士の存在が本劇のコンテクストであることを明らかにし、当時の下層階級のジェンダーロールの曖昧性を考察した。
2. 魅力ある英語英米文学ーその多様な豊饒性を探して	共	2022年1月	大阪教育図書	編者：玉井あきら。分担執筆：三宅律子、前原澄子、太田ちひろ、齋藤衛、田中梨恵、野間由梨花、米本弘一、八木美奈子、西村美保、清水緑、玉井暲、川島彩那、森元奈菜、佐藤牧子、中村由佳、山口良子、岩本朱未、福本奈々美、片山愛梨、橋本安央、松原陽子、ボイキン舞、山本秀行、富永英夫、福原大輔、ナサニエル・ルドルフ 執筆箇所：pp. 25-42. 「一五九九年のグローブ座からのメッセージー『ロンドンへの警鐘ーアントワープ包囲』」 概要：作者不詳の劇『ロンドンへの警鐘ーアントワープ包囲』と題する劇は、1599年に建てられて間もないグローブ座で初演された可能性が夙に指摘されてきた。筋書は、アントワープがスペイン軍の強奪と殺戮に遭った1576年の出来事を再現するものである。従来の

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
3. シェイクスピアとの往還—日本シェイクスピア協会創立六〇周年記念論集	共	2021年10月	研究社	<p>批評では、本劇はスペイン軍のアルマダ再来への警鐘として読み解かれたきたが、筆者はアントワープの包囲事件が、供給と報酬を絶たれた軍人の反乱であった点に着目し、本劇は高価な輸入品の消費を控えて国防への出費に協力することを、ロンドンの観客へ呼びかける教訓的な劇であったという結論を導いた。</p> <p>分担執筆：杉浦裕子、松田幸子、前原澄子、五十嵐博久、篠崎実、森祐希子、鶴田学、佐野隆弥、河合祥一郎、英知明、内丸公平、川野真樹子。</p> <p>執筆箇所：pp. 45-60. 「『お気に召すまま』における修辭のパロディ」</p> <p>概要：『お気に召すまま』の材源である『ロザリンド』において、恋する青年ロセイダーは見事な詩の腕前を發揮する。ところがシェイクスピアは劇において、同青年を不出来な詩を連作する素人詩人に変更した。また、材源とのさらなる違いは、ロザリンドの人物造形である。シェイクスピアのロザリンドは他の誰よりも雄弁で、自らが主体となって劇の幸福な結末をもたらす点で、まるで演出家のような役割を担っている。本論では、『お気に召すまま』における恋の詩とロザリンドの言葉に光を当てることによって、本劇が初演当時のコンテクストにおいてどのような意味を持っていたのかを明らかにした。</p>
4. グリム童話と表象文化—モチーフ・ジェンダー・ステレオタイプ	共	2017年7月7日	勉誠出版	<p>編者：大野寿子。 分担執筆：横道誠、橋本隆志、前田陽子、沖島博美、野口芳子、村山功光、稲毛理津子、鶴野祐介、前原澄子、谷口秀子、玉井暲、西尾亜希子、中山文、金城ハウプトマン朱美、齊藤公輔、溝井裕一、大野寿子、下程息、島田芽実、中村早希、竹原威滋。執筆箇所：pp. 201-214. 「ジョージ・ピールの『老婆の昔話』におけるふたつのモチーフ—死者の恩返しと井戸の中の頭」</p> <p>概要：1595年にロンドンで出版された本劇の台本は、相互に関連性を持たない複数の民話のモチーフが組み込まれており、その独自性が注目されてきた。本稿では、なぜこれらのモチーフが組み合わされたのかを、初演当時の観客の視点から再考した。</p>
5. Festive Romances in Early Modern Drama: Nostalgia for Ancient Hospitality and Wish-fulfillment Fantasy in Mobile Society	単	2009年8月20日	関西学院大学出版会	<p>英国エリザベス朝の現実社会で衰退の一途にあった民衆の祝祭が、様々な含意を伴ってロマンス劇に再現される点に着目し、それらの社会的・文化的意味を探ることを目的とした。ロマンス劇のドラマトゥルギーには、虚構と現実を併せ映す機能が備わっており、その祝祭表象も、単に劇世界の構成要素であるだけでなく、当時の社会的・文化的背景を巧みに映し出す機能を伴うことを明らかにした。</p>
2 学位論文				
1. Festive Romances in Early Modern Drama: Nostalgia for Ancient Hospitality and Wish-fulfillment Fantasy in Mobile Society (博士論文)	単	2006年9月	関西学院大学	<p>英国エリザベス朝の現実社会で衰退の一途にあった民衆の祝祭が、様々な含意を伴ってロマンス劇に再現される点に着目し、それらの社会的・文化的意味を探ることを目的とした。ロマンス劇のドラマトゥルギーには、虚構と現実を併せ映す機能が備わっており、その祝祭表象も、単に劇世界の構成要素であるだけでなく、当時の社会的・文化的背景を巧みに映し出す機能を伴うことを明らかにした。</p>
2. The Jacobean Ideal Union and the Ancient British Myths Retold in Epics and Plays: Warner, Heywood, Drayton and Shakespeare (M.A. 論文)	単	1995年12月	The University of Reading in U. K.	<p>1603年にイングランドの女王エリザベス1世が崩御し、その王位を継承したスコットランド王ジェイムズ6世が最初に打ち出した、イングランドとスコットランドの平和的統合政策は、ジェイムズ王の治世下において両国議会で最大の物議を醸し、同時代の文学作品に色濃く影響を残した。本論文では、統合問題に纏わる政治的・文化的コンテクストと同時代の文学作品の相互関連性を、広範な資料に基づき論証した。</p>
3. King LearとCoriolanusにおける	単	1993年3月	武庫川女子大学	<p>シェイクスピアの『リア王』と『コリオレイナス』は、ともに傑出した主人公の怒りが悲劇を展開させる点において、『ホメーロス』</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
怒りの考察（修士論文）				に代表される英雄悲劇の系譜に属するものと考えられる。また、肉親のつながりをクローズアップする筋書きにおいても、二つの悲劇には共通点が多く認められる。本論文では、それぞれの主人公の怒りを、「ことば」「権力」「自己」の3点からテキストに基づいて比較考察した。
3 学術論文				
1. 『ロンドンの4人の徒弟』—プロテスタント国家における十字軍の歴史観（査読付）	単	2024年3月	Mukogawa Literary Review No. 61 pp.1-13.	トマス・ハイウッドの『ロンドンの4人の徒弟』(The Four Prentices of London)は、ロンドンの徒弟が十字軍の英雄として活躍する荒唐無稽な筋書の特徴とする。このため従来の批評では、騎士として活躍する徒弟にもつばら注目が集まり、第1回十字軍という劇の設定について掘り下げて論じられることが殆どなかった。本論考では、この劇が聖地エルサレムの征服と征服王ウィリアム1世によるイングランドの征服を巧みに重ねることによって両者を否定的に表象し、人と人の争いの無益を説くとともに、十字軍に対するプロテスタント国家の新しい視座を与えるものであったことを論証した。
2. 『王立取引所の美しい娘』における求愛と結婚（査読付）	単	2020年3月	Mukogawa Literary Review No. 57 pp.1-13.	トマス・ハイウッドの作と見なされる『王立取引所の美しい娘』は、20世紀を通して等閑視されてきたが、ジュアナ・グリーン論考を嚆矢として近年少しずつ注目をされてきた。グリーンは、結婚市場という観点から本劇を読み解き、ジーン・E・ハワードは、製図師のクリプルに物書きの視点が窺えることを指摘する。また、サーシャ・ロバーツは、シェイクスピアの『ヴィーナスとアドニス』からの借用が認められる点に注目し、リンズィ・アン・リードは、ジョン・リリーの『ユーフィーズ』からのエコーが複数認められることを明らかにしている。本発表では、これらの観点がいかにか有機的に結びつくかを明らかにするために、求婚者たちによる文学作品への言及、針子による刺繍の意匠、クリプルによる婚姻操作の関連性を考察することによって、劇の統一の意味を明らかにした。
3. ローマ・カトリック教会への抵抗—『ハンティントン伯ロバートの失脚』と『ハンティントン伯ロバートの死』における寓意（査読付）	単	2019年3月	日本シェイクスピア協会 学会誌 Shakespeare Journal, Vol. 5 (58), pp.13-22.	アンソニー・マンディとヘンリー・チェトルの共作と見なされる『ハンティントン伯ロバートの失脚』と『ハンティントン伯ロバートの死』は、リチャード一世が十字軍に遠征した十二世紀末から十三世紀初頭のイングランドを舞台にするが、劇にはロビンフッドやマチルダの伝説といった架空の筋書が織り込まれ、聖職者の墮落、暴君ジョンと臣下の対立、罪なき者の死に光が当てられる。本論文では、これらの寓意を紐解くことによって、劇がローマ・カトリック教会への抵抗という統一のテーマを持つことを明らかにした。
4. エリザベス朝における金貸し言説と『ヴェニスの商人』の特殊性（査読付）	単	2017年4月	Profectus(武庫川女子大学大学院英語英米文学専攻研究会編) No. 22, p. 65-75.	本稿は、2016年7月に武庫川女子大学大学院の院生会で行った講演に基づく。シェイクスピアの『ヴェニスの商人』におけるアントーニオとシャイロックの対立は、金貸しが利子を取るか取らないかの一点に集約される。シャイロックは自らの金貸し業をusanceとして正当化するのに対して、アントーニオはそれをusuryとして非難する。本稿では、エリザベス朝の劇やパンフレットにおける金貸し言説を概観し、『ヴェニスの商人』の特殊性を明らかにした。
5. 『ロンドンとイングランドの鏡』におけるふたつの鏡—ホセアとヨナの説教（査読付）	単	2017年3月	Mukogawa Literary Review No. 54 pp.1-12.	トマス・ロッジとロバート・グリーン共作による劇、『ロンドンとイングランドの鏡』は、聖書の「ヨナ書」を主な材源に、古代アッシリアの都ニネヴェを舞台に筋書が展開される。しかしながら、劇にはニネヴェに悔悛をもたらした預言者ヨナのみならず、イスラエルの預言者ホセアが登場する。本稿では、ヨセアとヨナの役割を、エリザベス朝当時の説教のみならず、劇の大衆の喜劇性とからめて考察した。
6. 『エドワード1世』における反グリゼルダ表象—エリザベス女王へのオマージュ（査読付）	単	2015年3月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 第62巻, pp. 1-8.	ジョージ・ピールの『エドワード1世』において、王妃レオノーラは残酷でプライドの高い悪女として登場する。こうした史実と異なる王妃の人物造形は、当時の英国における反スペイン感情を映し出すものと考えられてきた。しかしながら、王妃の自己主張の記号は一貫して贅沢な衣服であることに注目すると、王妃はグリゼルダのパロディーであった可能性が指摘された。さらに、当時の君主エリザベス女王がしばしばグリゼルダに喩えられたことを併せて考えると、本劇は晩年の女王エリザベスへのオマージュとして創作されたと結論することができた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
7. エリザベス朝散文から18世紀小説への展開－語りの模索－(査読付)	単	2015年3月	Mukogawa Literary Review No. 52, pp.1-11.	写実主義に貫かれた小説は、18世紀に新たに生み出された文学形式であり、それ以前の散文から発展したものではないとの見解が定説となっている。しかしながら、語り手の概念が明確に成立したのは19世紀であることを踏まえると、18世紀の小説における語りの工夫は、エリザベス朝の散文にその原初を見出すことができる。本論では、英国最古の書簡体小説をはじめ、John Lyly, Anthony Munday, Sir Philip Sidney, Thomas Nasheによる語りの模索が、17世紀のAphra Behnを経て、Daniel DefoeやHenry Fieldingの語りへつながることを検証した。
8. 17世紀ロンドンの大衆劇場における騎士道ロマンス－道化によるパーレスクの意味－(査読付)	単	2014年3月	Mukogawa Literary Review No. 51, pp.1-11.	17世紀ロンドンの劇場で人気を博した騎士道ロマンス劇が当時のイングランドの新大陸への進出を寓意することは自明であるが、騎士道ロマンスの本筋が、道化の演じるパーレスクとパラレルをなす構造は注目に値する。本論では、3つの騎士道ロマンス劇、The Seven Champions of Christendom, Guy of Warwick, Tom a Lincolnに共通する道化のパーレスクにどのような意味が込められていたのかを考察した。
9. ウィリアム・バードの楽譜出版におけるシドニー追悼(査読付)	単	2010年12月	明石工業高等専門学校 研究紀要 第53号 pp. 23-28.	1588年に書籍商Thomas Eastによって出版されたWilliam ByrdのPsalmes, Sonets and Songsは、詩篇10篇、ソネットまたは牧歌16篇、悲しみと敬虔なる歌7篇と、Sir Philip Sidneyを弔う歌2篇から構成される5声の合唱曲集の楽譜である。本論文では、これまでのシドニー追悼詩に関する研究を踏まえた上で、巻末の挽歌2篇がこの歌集全体においてどのような意味を持つかについて新たな見解を提示した。
10. The Old Wives Tale : 祝祭と諷刺(査読付)	単	2006年3月	日本シェイクスピア協会 学会誌 Shakespeare News 第45巻第3号 pp. 3-11.	16世紀末の英国で女王一座によって演じられたロマンス劇『老婆の昔噺』は、構成に一貫性がなく、統一的解釈が困難と見なされてきた。本論文では、この劇がクリスマスの夜噺であることに着目し、劇に散りばめられた雑多な要素が、祝祭という枠の中で統一性を与えられることを明らかにした。初演当時の観客にとって、クリスマス、農神祭、再生儀礼、施しといった文化的事象が一連のつながりをもって受容された可能性を、さまざまな資料を用いて論証した。
11. トマス・ナッシュの『夏の遺言』における施しのテーマ(査読付)	単	2004年12月	明石工業高等専門学校 研究紀要 第47号 pp. 123-127.	16世紀末に、英国のカンタベリー大司教の邸宅で催されたトマス・ナッシュの余興、『夏の遺言』に散見する祝祭表象の意味を分析した。従来、この作品は、宗教改革が進む中で弾圧された民衆の祝祭を擁護するものと解釈されてきた。しかしながら、テキストを子細に分析すると、劇のテーマは、祝祭そのものではなく、祝祭時のもてなしの習慣についての議論であることが明らかとなった。質素・儉約と勤勉を重んじるプロテスタント社会における祝祭の文化的意味を併せて考察した。
12. 『カリストとメリベー』のふたつの悲喜劇(査読付)	単	2003年12月	明石工業高等専門学校 研究紀要 第46号 pp. 139-142.	英国で約100年の時を隔てて出版されたふたつの悲喜劇、ジョン・ラステルの創作と推定される『カリストとメリベー』(c.1530)と、ジェイムズ・マップによる翻訳『セレスティーナ』(1631)は、同一の原作に基づきながら、作風が大きく異なる。この相違を、当時の文化的背景に照らして考察した。さらに、英国の演劇が道徳劇の枠組みを脱して新しい喜劇へ発展していく過程を、ふたつの作劇を通して考察した。
13. Three Chronicle Epics in the Early Jacobean Context (査読付)	単	2002年12月	明石工業高等専門学校 研究紀要 第44号 pp. 131-139.	16世紀末から17世紀初頭にかけて英国で創作された3つの叙事詩、ウィリアム・ウォーナーの『アルビオンのイングランド』、トマス・ヘイウッドの『トロイア・ブリタニカ』、マイケル・ドレイトンの『ポリ・アルビオン』を考察した。いずれの詩にも、女王エリザベス1世へのノスタルジーと現王ジェイムズ1世への間接的批判を読み取ることができた。また、これらの叙事詩が、当時の関心事であったブリテン帝国の成立についての文化的メッセージを含む点に着目し、当時の出版に関する検閲やメディアの在り方についても考察した。
14. 『パリスの審判』をめぐる一考察(査読付)	単	2000年11月	明石工業高等専門学校 研究紀要 第43号 pp. 129-134.	ジョージ・ピールの『パリスの審判』は、16世紀英国の王室チャペル少年劇団によって御前上演された劇である。「パリスの審判」は、ルネッサンス期の詩や演劇にたびたび登場するモチーフであり、エリザベス朝の観客にとっては馴染み深い神話の題材であった。本論文では、この劇が、当時の文化的潮流であったネオ・プラ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
15. Britain in Shakespeare's Plays: King Lear and Henry V (査読付)	単	1999年11月	明石工業高等専門学校 研究紀要 第42号 pp. 151-158.	トニズムの「愛」と「貞潔」の概念構造をもつことを明らかにした。 シェイクスピアの悲劇『リア王』は、ジェームズ国王のブリテン統合政策が難航を極めた1606年の暮れに御前上演されたことが記録されている。王国の分割が悲劇を招く筋書きは、国王一座の座付作家であったシェイクスピアが、ブリテン統合を目指すジェームズ王へ送った逆説的賛辞であったと解釈することができる。また、『ヘンリー5世』(1599)では、イングランド・ウェールズ・アイルランド・スコットランドの連合軍の場が、国家の統合に伴う文化摩擦を象徴しており、ジェームズ新王による統合問題を予言的に暗示する可能性を考察した。
16. 『冬物語』におけるロマンスのドラマ トゥルギー: 語りとスペクタクル (査読付)	単	1999年2月	関西学院大学英米文学会 『英米文学』 第43巻第2号 pp. 15-27.	シェイクスピアの後期の劇が「ロマンス」と呼ばれる最大の所以は、現実感と虚構性の混淆する特殊なメカニズムにある。『冬物語』におけるレオンティーズの嫉妬をめぐる心理的リアリズムの欠如・オートリカスの多義的表象・熊の場面ならびに彫像の場面における語りとスペクタクルの連携を例に、当時の文化芸術の潮流におけるこの劇の位置づけを考察した。
17. シェイクスピアのソネットにおける eroticismのレトリック: "the Master Mistress of my passion" (査読付)	単	1998年8月	Profectus(武庫川女子大学大学院英語英米文学専攻研究会編) No.5, pp. 9-21.	シェイクスピアの『ソネット集』第1番から126番は、ある貴族の美青年にあてた愛の告白からなっており、ほぼ一連の作品とみなすことができる。これらにおいて、詩人が青年に捧げる愛をいかに解釈するかについては、従来から多くの議論が交わされてきた。とりわけ、本論考で取り上げる第20番は、過剰なまでの技巧がテキストの解釈を難解にしており、問題の作品として知られている。そこで、第20番でうたわれる愛のレトリックの重層的意味を、エリザベス朝における詩人とパトロンの関係・当時の男性間の 'friendship' の問題・sequenceに共通する詩人・青年・女性の三角関係の力学と絡めて考察した。
18. Philasterにおける政治諷刺のカモフラージュ (査読付)	単	1997年9月	関西学院大学人文学会『人文論究』 第47巻第2号 pp. 133-144.	ボーモントとフレッチャーによる悲喜劇『フィラスター』には、同時代の劇作品『ハムレット』や『オセロー』からの借用が認められることが定説となっている。これらの借用がフィラスターの人物像に及ぼす影響を明らかにするとともに、パーレスクという文学形態が、同時代の文化的・政治的コンテキストとどのように関わりを持っていたかを考察した。
19. Dilemma between Obedience and Justice in Cymbeline (査読付)	単	1997年5月	Profectus(武庫川女子大学大学院英語英米文学専攻研究会編) No.4 pp. 15-31.	ShakespeareのCymbelineには、主君への忠誠とモラルの葛藤が形を変えて繰り返し描かれる。そこでは、賢明な家臣の不服従は、悲喜劇の枠内で円満に解決される。本論稿では、これらの葛藤がルネッサンスの社会的コンテキストを反映するものであったことを論証するとともに、この劇に描かれる喜劇的不服従の意味を考察した。
20. Cymbeline in the Jacobean Context: The Meaning of the Happy Union (査読付)	単	1996年11月	関西学院大学英米文学会 『英米文学』 第41巻第1号 pp. 61-75.	シェイクスピアのロマンス劇は、再会と和解によるハッピー・エンディングを特徴とするが、『シンペリン』の結末で謳われる「ブリテンの平和と豊饒」は、1603年に即位したジェームズ一世が推し進めたイングランドとスコットランドの平和的統合政策を彷彿とさせる。本論文では、この劇の結末が、当時の文化的・政治的状况においていかなる意味を持ち得たかを、劇場および観客事情を踏まえた上で考察した。
21. Thomas Campion's The Somerset Masque in the Context (査読付)	単	1996年2月	Profectus(武庫川女子大学大学院英語英米文学専攻研究会編) No.3 pp. 17-32.	1613年12月26日、ジェームズ国王の御前で、Earl of SomersetとLady Francesの結婚式が華々しく執り行われた。その祝いの宴に、Thomas Campionは仮面劇を書くことを仰せつかる。ところがこれは、Francesの再婚であり、Howard家の政治的野心を内因とする日く付きの祭事であった。本論稿では、Campionの仮面劇が、この困難な状況をいかに巧みに曖昧化し、結婚称賛に置き換えているかを分析した。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. The Fair Maid of the Exchangeにおける愛のドラマ	単	2019年10月	日本英文学会中国四国支部 第72回大会 於 徳島大学	トマス・ハイウッドの作と見なされる『王立取引所の美しい娘』は、20世紀を通して等閑視されてきたが、ジュアナ・グリーン論考を嚆矢として近年少しずつ注目されてきた。グリーンは、結婚市場という観点から本劇を読み解き、ジーン・E・ハワードは、製図師のクリブルに物書きの視点が窺えることを指摘する。また、サー

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1. 学会ゲストスピーカー				
2. シェイクスピア劇の面白さー言葉の魔術	単	2014年6月	武庫川女子大学春季英文学会講演会 於 武庫川女子大学	シャ・ロバーツは、シェイクスピアの『ヴィーナスとアドーニス』からの借用が認められる点に注目し、リンズィ・アン・リードは、ジョン・リリーの『ユーフィーズ』からのエコーが複数認められることを明らかにしている。本発表では、これらの観点がいかにか有機的に結びつくかを明らかにするために、求婚者たちによる文学作品への言及、針子による刺繍の意匠、クリプルによる婚姻操作の関連性を考察することによって、劇の統一の意味を明らかにした。生誕450年を迎える今もなお、シェイクスピアの劇は様々な翻案によって世界中で上演されている。しかしながら、シェイクスピアが劇を書いた時代には、芝居は観るものではなく聴くものであった。白昼に屋根のない劇場で、嵐の海上や夜の暗闇を演出するには、すべての状況を言葉で説明する必要があったからである。講演では、『ロミオとジュリエット』のバルコニーの場面から有名なせりふを取り上げ、無韻詩のリズム、比喩の反復、イメージの連鎖等について解説した。
3. Anthony Mundayによる騎士道ロマンスの出版	単	2013年12月	日本英文学会関西支部 第8回大会 於 龍谷大学大宮キャンパス	中世のスペインに由来する騎士道ロマンスAmadis de Gauleの物語は、16世紀末までにヨーロッパ各国で翻訳され、カトリックとプロテスタントの対立の深まる16世紀において、汎ヨーロッパ的テキストとして読み継がれた。近年の学説で「隠れカトリック」のレッテルを貼られるAnthony Mundayは、本書の英訳出版に力を注いだ。本発表では、Mundayの騎士道ロマンス翻訳における宗教観および国家観を考察した。
2. 学会発表				
1. ジェンダーロールの呪縛と越境	共	2022年12月	日本英文学会関西支部 第17回大会 於 甲南大学岡本キャンパス	(全体概要) 文学作品が一般市民の手に届き始めるようになった初期近代以降のテキストに表出される規範的ジェンダーロールに焦点を当て、ジェンダーロールに縛られる姿、あるいはそれと格闘し越境しようとする姿を分析する。時代、文体、ジャンルの異なる多種多様な作品に記録されるジェンダー問題の痕跡を探るとともに、その意義について論じた。 (担当部分概要) 16世紀末から17世紀にかけて大衆劇場で上演された、トマス・ヘイウッドの『西国の美しい娘』(第1部)のヒロインは、著しい主体性を発揮して商業活動に携わり巨額の富を築き上げるのみならず、男装して海賊船に乗り込み、敵国スペインに立ち向かう。発表では、受動的、従属的な女性像とかけ離れたヒロインが労働者階級の娘である点に着目し、工業化以前の女性による商業活動と男装する女性兵士の存在が本劇のコンテキストであることを明らかにし、当時の下層階級のジェンダーロールの曖昧性を考察した。
2. 『ロンドンの4人の徒弟』における十字軍の歴史	単	2022年10月	第60回シェイクスピア学会 於 甲南大学岡本キャンパス	(発表者) 司会：竹山友子 講師：前原澄子、齊藤美和、西垣佐理、中川千帆 トマス・ヘイウッドによる『ロンドンの4人の徒弟』は、徒弟として奉公する4人の兄弟が十字軍に出陣し、エルサレムを異教徒から解放して、それぞれ異国の王に転身を遂げる筋書で構成される。16世紀末から17世紀にかけて、商人や職人の偉業を謳う創作が数多く生み出されたことから、本劇もその一例として夙に注目されてきた。そのため、市民騎士として活躍する徒弟に批評家の関心が集まりがちで、これら4人を率いるノルマンディ公ロバートの存在は一様に等閑視されてきた。しかしながら、血気に逸って分裂と反乱の危機を生み出す兄弟を仲裁し、十字軍を勝利に導くノルマンディ公は本劇において重要な役割を担っている。発表では、第1回十字軍におけるノルマンディ公の活躍に言及した中世の年代記や、マイケル・ドレイトンの『ノルマンディ公ロバートの悲劇的伝説』(1596)を新たな手がかりとして、本劇が伝える十字軍の歴史について新たに考察した。
3. The Fair Maid of Exchangeにおける恋の駆け引きの諸相	単	2019年06月	関西シェイクスピア研究会	Thomas Heywoodの作と見なされる喜劇、The Fair Maid of Exchangeは、王立取引所で働く針子の娘をめぐる求愛と結婚を骨子とするが、「フェンチャーチに住むクリプルの楽しいユーモア」と

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
4. 『十二夜』を読む	共	2017年10月	第56回シェイクスピア学会 於 近畿大学	<p>この副題が示すように、真の主役は劇中で2組のカップルを誕生させる製図師のクリプルである。本劇は20世紀を通して等閑視されてきたが、Juana Greenの論考を嚆矢として、近年少しずつ注目されつつある。本発表では、劇における求婚者たちによる同時代の文学作品への言及、針子による刺繍の意匠、製図師クリプルによる婚姻操作について考察した。</p> <p>(全体概要) シェイクスピアの『十二夜』を異性装、熊いじめのメタファー、贈与論、主従間の友情、ラノベといった多様な観点から再考した。</p> <p>(担当部分概要) 各発表者に対してコメントを行った。</p> <p>(発表者) コーディネイター：中村未樹 メンバー：奥山厚子、高根広大、田中愛美、廣野允樹、松山響子 コメントイター：前原澄子</p>
5. A Looking Glass for London and England-2人の預言者の役割-	単	2015年10月	第54回シェイクスピア学会 於 北海道教育大学函館校	<p>Thomas LodgeとRobert Greeneの共作とされる劇、A Looking Glass for London and Englandは、1594年から1617年の間に5版を重ねたことから、当時は人気を博した劇であったと考えられる。墮落したニネヴェの都を舞台上から観察する預言者ホセアが、コーラスの役割を担い、場面の合間にロンドンの観客に向かって悔い改めを呼びかける構造は、腐敗したロンドンをエルサレムの崩壊に重ね合わせた当時の数々の説教を彷彿とさせる。劇はホセアの呼びかけとは無関係に進行し、罪深い登場人物たちは雷に打たれ、炎に吞まれて絶命する。一方、預言者ヨナが登場し、聖書の筋書き通りニネヴェに悔い改めを呼びかけると、その言葉はたちまち威力を発揮して劇は大団円を迎える。本発表では、同時代に出版された説教に照らして、これら2人の預言者の役割について考察した。</p>
6. マンデイのロビンフッド劇における古代ユダヤの表象	単	2013年10月	第52回シェイクスピア学会 於 鹿児島大学	<p>The Downfall of Earl of Robert HuntingtonとThe Death of Earl of Robert Huntingtonは、海軍大臣一座の上演したロビンフッド劇2部作として知られている。舞台設定は、リチャード1世が十字軍に遠征した12世紀末から、その王位をジョンが継いだ13世紀初期のイングランドであるが、主人公の伯爵が劇中でロビンフッドになり代わるなど、史実と虚構がないまぜになった構成から、これまで統一的解釈の難しさが指摘されてきた。本発表では、中世のイングランドを舞台とするこの劇に、古代ユダヤの表象が繰り返し用いられることに注目し、劇の意味を新たな角度から考察した。</p>
7. エリザベス朝散文とその後-18世紀小説への展開	共	2012年5月	日本英文学会大会 第84回大会 於 専修大学	<p>(全体概要) 18世紀の小説は、リアリズムを特徴とするため、虚構と現実の境界が曖昧であったエリザベス朝の散文との連続性が問われることは従来ほとんどなかった。本シンポジウムでは、こうした定説を覆す形で、エリザベス朝の散文から18世紀小説への連続性を考察した。</p> <p>(担当部分概要) 現実を描写した18世紀の小説にも様々な語りの工夫が凝らされており、それらの試行錯誤の前例は、エリザベス朝の散文に見出すことができることを論証した。英国最古の書簡体小説The Image of Idlenessを出発点とし、John Lyly, Anthony Munday, Sir Philip Sidney, Thomas Nasheらの様々な語りの手法に光を当てることによって、これらが17世紀末のAphra Behenを経て、Daniel DefoeやHenry Fieldingの語りへつながることを検証した。</p> <p>(発表者) 司会：佐野隆弥 講師：原田範行、本多まりえ、前原澄子</p>
8. マンデイのハンティントン劇における殉教のテーマ	単	2011年9月	関西シェイクスピア研究会	<p>アンソニー・マンデイのハンティントン劇の第2部では、ジョン王の情欲から身を守るために服毒して死を遂げた、ハンティントン伯爵夫人マチルダの悲劇が展開する。劇の材源には、同時代にMichael Draytonによって書かれた詩Matildaが挙げられるが、マンデイはこの材源を大きく改変した。もっとも重要な変更点は、マチルダを既婚の女性に変え、積極的な殉教者のイメージを重ねたことである。一方、ハンティントン伯爵は、ユダに裏切られたキリスト</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
9. ロマンティック・リバイバル騎士道ロマンスとエリザベス朝文学	共	2009年10月	第48回シェイクスピア学会 於 筑波大学	<p>のイメージに繰り返し重ねられる。本劇が一種の殉教者劇である可能性を考察した。</p> <p>(全体概要) エリザベス朝騎士道文学を大衆文化のコンテキストで捉え直し、その文化的意義を再検証した。</p> <p>(担当部分概要) これまでほとんど論じられたことのない騎士道ロマンス劇The Seven Champions of Christendom, Tom a Lincoln, Guy of Warwickに共通する特徴を明らかにし、17世紀の大衆劇場における騎士道ロマンス劇の上演と受容を考察した。</p> <p>(発表者) コーディネーター：竹村はるみ メンバー：井出新, 前原澄子, 森井祐介</p>
10. 『エドワード1世』一書き加えられた王妃レオノールの筋書き	単	2008年10月	第47回シェイクスピア学会 於 岩手県立大学	<p>ジョージ・ピールの『エドワード1世』の唯一現存するクォート版には、ト書きの不備や場面の不整合が散見することから、本筋との関連性が希薄である王妃の筋書きは、何らかの理由による加筆と見なされてきた。1971年には、G. K. Dreherによって王妃の罪業に関わる一切の場面が削除され、エドワード1世のウェイルズ征服に焦点を当てた簡略版が復元されている。このようなテキスト研究が進む一方で、現存するテキストを統一的に解釈する試みは等閑視されてきた。本発表では、残酷でプライドの高い王妃レオノールの筋書きが初演当時にどのような意味を持ち得たかを明らかにすることによって、現存するテキストの統一的解釈を試みた。</p>
11. トマス・ナッシュの『夏の遺言』における祝祭と諷刺	単	2006年4月	関西シェイクスピア研究会	<p>C. L. バーバーが『シェイクスピアの祝祭喜劇』(1959)年において、この劇を祝祭擁護の劇と解釈してから、その見解は多くの批評家によって踏襲されてきた。ところが、この劇が上演された1590年代にはすでに宗教改革も軌道に乗り、民衆の祝祭は下火であった。本発表では、「会計報告」という劇の設定に着眼し、この劇が単なる祝祭擁護にとどまらず、貨幣価値の高騰する階級社会の流動性を諷刺するものであったことを論証した。</p>
12. シェイクスピア時代の劇場	単	2003年1月	明石工業高等専門学校 イブニングセミナー	<p>シェイクスピアが実際に活躍した英国ルネサンス時代の劇場には、客席と舞台を仕切る幕や精緻な舞台装置はなく、劇の細部は観客の想像力によって補われるものであり、また劇場は当時最大の娯楽の場であったのみならず、一種のメディアの役割を果たしていたことをさまざまな角度から照射した。さらに、今日のグローブ座での上演についても言及した。</p>
13. George PeeleのThe Old Wives Tale再考	単	2001年6月	関西シェイクスピア研究会	<p>劇を構成する7つのモチーフが、登場人物それぞれの身の上話からなる点に着眼し、これらのモチーフのメドレーが、当時流行した滑稽譚の体裁と重なることを明らかにした。さらに、メドレーがラテン語でSatura(寄せ集め/諷刺)を意味することを踏まえて、この劇が当時の滑稽譚にメニッポスの諷刺を加えて劇化したものであることを論じた。</p>
14. 『パリスの審判』におけるアレゴリーの手法一愛と貞潔の対立から融和へ	単	2000年10月	第39回シェイクスピア学会 於 神戸松蔭女子学院大学	<p>エリザベス女王1世の宮廷で上演されたジョージ・ピールによる『パリスの審判』は、パリスのヘレン奪略からトロイ戦争までの神話を題材にした寓意的作品である。この劇の独自性は、ヘレンを奪ったパリスが、裁判を経て無罪放免される点にある。これは、中世の価値観に基づく悪女のヘレン像と、新プラトン主義の言説に基づく善良なヘレン像を撞着的に表現したものであったことを明らかにした。</p>
15. ロマンズ劇を読むーCymbelineとThe Winter's Taleを中心に	共	1999年10月	第38回シェイクスピア学会 於 岩手大学教育学部	<p>(全体概要) シェイクスピア晩年のロマンス劇から、『シンベリン』と『冬物語』を取り上げ、当時の文化的・社会的背景に照らしてテキストを読み直し、それらをもとにセミナー形式で作品を再解釈した。</p> <p>(担当部分概要) ルネサンス期の絵画や文学には、オウィディウスのピグマリオンを下敷きにする変身物語のモチーフが数多く認められる。演劇においても、その例は少なくない。『冬物語』の最終場面でレオンティーズの16年の悔い改めに報いる彫像の変身も、その一例とみなすことができる。さらに、彫像が生身の人間へと変身を遂げる『冬</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
16. Cymbelineに見る Pax Britannica の幻像	単	1997年10月	第36回シェイクスピア学会 於 福岡大学	物語』のクライマックスは、視覚芸術への関心が高まりつつあった当時の文化背景と深く関わりを持つことを明らかにした。 (発表者) 司会：末廣幹，メンバー：阿部かおる，伊藤洋子，蒲池裕子，佐々木和貴，鶴田学，中村裕英，前原澄子，正岡和恵，真部多真記，吉原ゆかり シェイクスピアの『シンベリン』の最終場面における古代ブリテンとローマの和平締結が、Pax Romanaを具現することを明らかにした。ローマからブリテンにキリスト教がもたらされ、ローマ法王との断絶を経てプロテスタントの帝国が誕生した歴史的コンテクストと、ロマンス劇特有の劇的効果を踏まえ、シンベリン王のローマ帝国への従属が、さまざまなアンチテーゼを理想的に解決するように描かれていることを指摘した。
17. King Lear and History	共	1996年10月	第35回シェイクスピア学会招聘 Jonathan Bate教授 セミナー 於 京大会館	(全体概要) シェイクスピアの『リア王』を同時代の文化的・政治的コンテクストに位置づけ、発表者の提供する観点をめぐって討議を行い、作品の新たな解釈を試みた。 (担当部分概要) 『リア王』が御前上演された1606年末の社会背景に注目し、国王一座の座付作家であったシェイクスピアが、リア王のブリテン分割を悲劇的に描くことによって、ブリテン統合を目指すジェームズ国王へ逆説的賛辞を送った可能性を明らかにした。一方、リアの悲劇は統合政策のプロパガンダを越えて、ジェームズ国王の絶対主義を根源的に問い直すものでもあった点を併せて提起した。 (発表者) リーダー： 斉藤衛 スピーカー： ジョナサン・ベイト，蒲池美鶴，塚本靖，前原澄子，竹中昌宏
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. John Fletcher and Philip Massinger, Love's Cure, or The Martial Maid. Edited by José A. Pérez Díez..	単	2023年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』 第44号, p. 10.	書評 異性装をテーマにした喜劇、Love's Cure, or The Martial MaidのテキストがJosé A. Pérez Díezによって新たに編集された。The Works of Beaumont and Fletcher Canon (1976)の第3巻に収録されて以来、46年ぶりの改編である。従来、この劇はポーモントとの共作として扱われることが多かったが、編者は劇中で言及される同時代の出来事をもとに、創作年代を1615年の前半と推定し、共に携わったのは1613年に断筆したポーモントではなく、マッシンジャーであったと主張する。舞台上演に強い関心を持つ編者が、特に力を注いだのはト書きの充実である。本書が初期近代演劇のジェンダー研究に大きく貢献することは疑いない。
2. Margaret Tudeau-Clayton, Shakespeare's Englishes: Against Englishness.	単	2021年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』 第42号, p. 4.	書評 16世紀から17世紀にかけて、外国語に由来する難解な言葉を排して「わかりやすい英語」(plain English)の使用を標榜する一連の動きがあったことは、Thomas WilsonのArte of Rhetorique (1553)をはじめ、数々の言説に裏づけられる。本書は、こうした動向をプロテスタントのエリートによる「文化改革」と定義し、シェイクスピアが1590年代に創作した喜劇および歴史劇にこれらの改革に抗う姿勢を読み取る。英国のEU離脱をも視野に入れた本書は、時宜を得た問題を投げかけ、紙上で活発な議論を引き起こした点で大きな意義が認められる。
3. Anne Barton, Shakespearean Forest.	単	2019年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』 第40号, p. 2.	書評 本書は、2013年に80歳で亡くなられたシェイクスピア研究の大家 Anne Bartonによる、ロンドン大学におけるNorthcliff lectures (1994)と、ケンブリッジ大学のTrinity College(2003)をもとにした書である。Bartonの死後、教え子が長期にわたる編集作業を経て出

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
4. Matthew Steggle, Digital Humanities and the Lost Drama of Early Modern England: Ten Cases Studies.	単	2018年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』第39号, p.4	版された。森に関するこれら一連の論考をたどるとともに、Adrian Pooleによる前書き、Peter Hollandによる後書き、編者Hester Lee-Jeffriesが書き加えた近年の森や自然に関する研究動向について書評を行った。 書評 本書は、1580年から1642年に上演された劇の中から、テキストが紛失した10の劇を取り上げ、それらのタイトルを手掛かりにデジタル機能を駆使して得られた研究成果を世に問うものである。第1章のTerminus & Non Terminus、第3章のCutlack、第6章のAlbere Gales、第8章のThe Angel Kingを中心に概要を紹介し、これらの研究成果が、データベースの活用の有効性を十分に立証するものであることを論じた。
5. David Loewenstein and Michael Witmore, eds. Shakespeare and Early Modern Religion.	単	2017年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』第38号, p.1	書評 本書は、英国初期近代の文学、文化、歴史を専門にする14名の研究者がそれぞれの視点から、シェイクスピアと宗教の関わりを論じた学際的な論文集である。本書の統一的テーマは、エリザベス朝当時の宗教の潮流が多岐にわたっていたことを踏まえた上で、シェイクスピア劇に混在する多様な宗教観を再考する点にある。約300頁に収められた論考にはそれほど新しい発見は認められないものの、アンチテーゼの提示によって或るひとつの視点から劇をとらえることを許容しないシェイクスピア劇の本質を、宗教を切り口に改めて浮き彫りにしたことを論じた。
6. Gillian Woods, Shakespeare's Unreformed Fiction	単	2015年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』第36号, p.6.	書評 シェイクスピアの劇には、『ハムレット』の煉獄をはじめ、宗教改革以前の文化がしばしば色濃く映し出される。近年の批評において、これらはカトリックの視点から論じられることが多かったが、著者はカトリックの枠を越えて、宗教改革以前の種々雑多な要素がドラマをいかに構築し、劇的効果をもたらすかを論じる。膨大な一次資料と広範な過去の批評を踏まえて作品が読み解かれ、作品論の進化を裏づける書であることを論じた。
7. Meredith Anne Skura, Tudor Autobiography: Listening for Inwardness	単	2011年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』第32号, p.8.	書評 「自伝」(autobiography)には、自己の存在を客体化する近代的概念が伴うため、自伝研究はこれまで17世紀以降の著作を対象にするのが常識であった。ところが近年になって、16世紀の日記や旅行記、詩やパンフレットの類いにも、個人の生きた記録(life-writing)を読み取ろうとする動きが活発である。本書もこうした視点に立って、これまで等閑視されてきたチューダ朝の自伝的著作を発掘する。才人の著作のみならず、音楽家の手記や農耕生活を歌ったベストセラーにも光が当てられており、本書が英国初期近代の自伝研究の発展に寄与するものであることを述べた。
8. Charles Nicholl, The Lodger: Shakespeare on Silver Street	単	2009年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』第30号, p.4.	書評 17世紀初頭、シェイクスピアがロンドンのシルバー通りの髪飾り職人の工房に下宿していたという事実は、早くも20世紀の初頭に、ある訴訟記録の発見によって明らかにされた。本書は、この記録から新たに読み取った事実の断片をつなぎ合わせ、劇作家として絶頂期にあったシェイクスピアの日常を軽妙な語り口で掘り起こす。本書はあくまでも広い読者層を対象にした知的娯楽書の類いであり、シェイクスピア研究者の学問的興味を触発する要素には欠けるものの、17世紀初頭の国際貿易都市ロンドンを垣間見せることに成功した名著と言えることを論じた。
9. Andrew Hadfield, Shakespeare and Republicanism	単	2008年3月	日本シェイクスピア協会学会誌 Shakespeare Studies 第45巻 pp. 45-47.	書評 エリザベス朝末期の政体に共和主義の萌芽を認めるか否かについて、歴史家の間で長く議論が続いている。本書は、共和主義思想が当時広く浸透していたことを広範な一次資料に照らして論証し、シェイクスピアの劇や詩にその影響が色濃く映し出されることを論じたものである。従来あまり顧みられないことのない一次資料に光を当て、シェイクスピア作品の解釈の可能性を大きく広げた点に本書の意義があることを明らかにした。
10. 『ウィンザーの陽気	単	2008年3月	日本シェイクスピア	研究ノート

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
『な女房たち』における羊飼いの詩をめぐって	単	2005年4月	ア協会 学会誌 Shakespeare News 第47巻第3号 p. 41.	『ウィンザーの陽気な女房たち』で、マーローの有名な羊飼いの詩が一行だけ詩篇137のそれと入れ替えて歌われる場面がある。従来は、決闘を前にしたエヴァンスの精神的動揺を反映した歌い誤りと解釈されてきたが、この詩が当時メロディーを伴って口ずさまれたことに着眼すると、異なる解釈が可能となる。この劇の道化役者といえるフォルスタッフのちぐはぐな言動は、「グリーンズリーブズのメロディーで詩篇100を歌うようだ」と形容される。すなわち、羊飼いの求愛のメロディーで詩篇137の冒頭を歌うエヴァンズは、ちぐはぐな滑稽さを体現する擬似フォルスタッフであったと考えられることを論じた。
11. Michael L. Hays, Shakespearean Tragedy as Chivalric Romance: Rethinking Macbeth, Hamlet, Othello and King Lear	単	2005年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』 第26号, p. 1.	書評 本書は、シェイクスピアの四大悲劇にイギリス騎士道ロマンスの要素を見出す試みである。シェイクスピアの執筆当時、騎士道ロマンスは根強い人気を保っており、その文化的土壌からシェイクスピアの四大悲劇も創作されたことが、政治・文化的アプローチとは一線を画する立場から、あくまでも作品の解釈に基づいて述べられていることを論じた。
12. Janet Hill, Stages and Playgoers: From Guild Plays to Shakespeare	単	2003年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』 第24号, p. 2.	書評 中世の民衆劇の伝統を継承し、エリザベス朝の劇でも独白や傍白を通じて観客への呼びかけが多用されたことについては、これまでも議論が重ねられてきた。劇世界を象徴する特定の空間(locus)に対して、観客へ直接呼びかけが行われる場(platea)は、時空の定まらないニュートラルな空間と見なされる。本書は、中世のギルド劇(聖史劇)から初期近代のシェイクスピア劇までを一連の発展経過として幅広く視野に入れた点が斬新であることを明らかにした。
13. Susan Wiseman, Drama and Politics in the English Civil War	単	2000年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』 第21号, p. 5.	書評 1642年に勃発したピューリタンの内乱は、ロンドンの劇場を閉鎖に追い込み、18年にわたって演劇活動を不毛にしたが、劇場閉鎖期には、上演の禁止にもかかわらず、数多くの劇テキストが出版された。本書は、これまで演劇史の空白期間と見なされてきた1642年から1660年に焦点を当て、当時流通したニュースやパンフレットを含む様々な劇テキストを手掛かりに、内乱期の演劇文化に新たな光を当てて論じた。
14. James Cunningham, Shakespeare's Tragedies and Modern Critical Theory	単	1999年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』 第20号, p. 3.	書評 近年の先鋭な批評理論によって次々に新しいシェイクスピア解釈が生み出される中で、旧来のヒューマンイズム批評がともすれば不当に批判される傾向に対して、著者は鋭い疑問を投げかける。本書は、シェイクスピアの悲劇をめぐる近年の主だった批評を網羅的に取り上げて一種のメタ・クリティシズムを行いながら、新旧の二項対立的図式へ陥りがちな今日の批評の在り方を改めて問い直すことを明らかにした。
15. Andrew Gurr, The Shakespearian Playing Companies	単	1997年4月	『関西シェイクスピア研究会会報』 第18号, p. 5.	書評 アンドリュー・ガーの『シェイクスピア時代の劇団』は、1560年代から1642年に亘ってロンドンに存在した劇団の歴史を包括的に考証した研究書である。本書の主眼は、劇団の活動と政局の関連性を見直すことにあり、とりわけパトロンの影響力が重要視されている。書評では、著者による最新の資料の活用や近年の新歴史主義批評への目配りを評価する一方、パトロンと劇団の権力構造の単一的な図式には、見直しの余地があることを提言した。
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2021年4月～現在に至る	日本英文学会関西支部 会計監査
2. 2020年4月～2021年3月	日本英文学会関西支部 編集委員
3. 2019年4月～2023年3月	日本シェイクスピア協会 Shakespeare Studies Editorial Board
4. 2015年4月～2017年3月	日本英文学会関西支部 副事務局長

学会及び社会における活動等

年月日	事項
6. 研究費の取得状況	
5. 2015年12月～2017年12月	関西シェイクスピア研究会 世話人(シニア)
6. 2014年4月～2016年3月	日本シェイクスピア協会 Shakespeare Journal査読委員
7. 2014年4月～2015年3月	日本シェイクスピア協会 委員
8. 2009年12月～2011年12月	関西シェイクスピア研究会 世話人(ジュニア)
9. 2004年4月～2006年3月	関西シェイクスピア研究会 編集委員